テーマ	***いじめの防止を目指して***
研究名称	いじめを防止するための心理学的研究

適用分野	社会心理学、教育心理学、臨床心理学
氏名所属	大西彩子 教授 文学部　人間科学科

内容

●特徴

小学生から高校生までを対象に、特に社会心理学の観点からのいじめの研究をしています。これまでの研究から、いじめを防止するためには、学級の集団規範をいじめに否定的な状態に保つことが重要であることが分かりました。

まず、いじめの加害傾向が低い生徒が多い学級では、いじめに否定的な集団規範が存在していることが明らかになりました。いじめに否定的な学級の集団規範は、そこに所属する生徒にいじめへの罪悪感を予期させる効果もありました。

こうした、いじめに否定的な学級の集団規範は、学校の先生の受容的で親近感があり、自信のある客観的な日頃の指導態度との関連が示されており、教師のそうした指導態度を生徒が強く感じているほど、学級の集団規範がいじめに否定的になることが分かっています。

●研究内容

現在は、社会心理学の別の理論を用いて認知の歪みといじめの加害傾向の短期的・長期的関連についての研究を行っています。Bandura (1996, 2002)が提唱したSelective Moral Disengagement（選択的道徳不活性化)は、向社会的な感情を抑制し、反社会的行動を引き起こす認知の歪みのメカニズムとして国内外で注目されており、青少年の反社会的行動や攻撃行動との関連が様々な研究で認められています(Barchia & Bussey , 2011 ; Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014)。いじめの加害者は罪悪感や恥の感情が喚起されると、被害者を攻撃することが難しくなります。しかし、深刻ないじめでは被害者に対する心理的、物理的な攻撃行動が長期間継続されます。認知の歪みは、いじめ加害者の罪悪感や恥などの感情を抑制し、いじめの加害行動を促進していることが予測されます。

本研究では、中学生に対する縦断研究により、自己中心性に関する認知の歪みが、男女ともに短期的には直接的に，長期的には間接的に、いじめの加害経験を増加させることが明らかになりました。

キーワード	いじめ、中学生、小学生、認知のゆがみ、集団規範
連携方法	■ 講演　■ 研修　□ 研究相談　■ 学術調査　□ コメンテート　■ 共同研究